

地名における綴りと発音の“ずれ”

—ウスター、東京、カトマンドゥ、金海の場合—

米地 文夫*・姜 奉植*・ベッド B.ピスタ**

要 旨 地名は音声と文字との二つの形で伝えられる地理的情報で、それぞれの人類集団が用いる言語と文字とで表現されるが、地名の読みないし発音と文字による表記との間に“ずれ”があって、他国を訪れた旅行者にとっては、表音文字の通りに読んでも通じない、というような不便さに直面することが少なくない。かなり多くの地名の表記にこのような問題点のあることは、これまでほとんど指摘されたことはなかったが、本稿はそのような綴りと発音との不一致の例として、英国のウスター、日本の東京、ネパールのカトマンドゥ、韓国の金海などを取り上げ、そのような事例が諸言語にみられること、また、その類いの“ずれ”が生じたのには、さまざまな原因があり、また、そのような“ずれ”による分かりにくさへの対応としては、発音に合わせたローマナイズ表記やかな表記の併用が望ましいことを論じた。

キーワード 地名、表音文字、発音、綴り字発音

はじめに

地名は音声と文字との二つの形で伝えられる地理的情報で、それぞれの人類集団が用いる言語と文字とで表現され、しかもその由来や用法にはそれぞれの民族固有の文化的特質が反映している。したがって地名に関する問題は多様で複雑であり、いまだに十分な検討の行われていない問題も多いと思われる。その一つが、本稿で取り上げる地名の読みないし発音と文字による表記との“ずれ”の問題である。かなり多くの地名の表記にこのような“ずれ”のあることは、これまでほとんど指摘されたことはなかったが、本稿はそのような綴りと発音との不一致について、いくつかの例を取り上げて検討を行うものである。

文字による表記と発音とが異なること自体は、多くの言語にみられることであり、とりたてて論議するほどのことではないともいえよう。しかしながら、こと地名に関しては大きな問題である。なぜならば、他国を訪れた旅行者にとって、地名を読む（発音がわかる）ことが可能ならば、通訳ないし案内者無しで旅行が可能になるので、その国で用いられている表音文字の読み方を学べば、旅先での行動の範囲が広がるはずである。ところが駅名の表示や道路の地名の表示を表音文字の通りに読んでも、通じない、もしくは現地の人々の発音を聞いても地図のどこを指すのかわからない、など困難な事態に直面することが少なくない。

しかも、多くの地名は辞書にも載っていないので発音を調べるのが難しいし、また地図には文字のみが記入されていて、いかに発音されるかは書き込まれていないことが多い。

表意文字は字面のみでは読みがわかりにくい、表音文字の場合は一つ一つの文字に沿って発音すれば通ずるはずである。しかし、このように実際には、綴りと発音とは必ずしも一致していないことを、本稿では地名の場合について述べ、その問題点や対応策を指摘したい。

* 岩手県立大学総合政策学部

〒 020-0193 岩手県滝沢村滝沢字巣子152-52

**岩手県立大学ソフトウェア情報学部

同上

Ⅱ 地名の綴りと発音の不一致

1 見逃されていた地名の綴りと発音の不一致

地名については、これまでも多くの研究があり、なかでも梶村(1978)は地名(梶村のいう地理名称)の表現について綿密かつ網羅的に検討している。綴りと発音の関係についても、異なった言語が同じ綴りに違う読みを行う場合、例えばロレーン地方の Metz の発音にはメス(フランス語読み)とメッツ(ドイツ語読み)の二つがあることや、方言の発音がオワシェと中間的なものであったため、二通りに読まれてきた尾鷲のオワセとオワシの例なども取り上げられている。

これらの異言語間の違いや、表意文字の方言的読みの問題¹⁾とは別に、筆者らは、これまで問題にされていなかった問題もあることを知った。

すなわち、一言語において表音文字の綴りとその発音が違う例があることで、これまで恐らくは触れられたことがなかったと思われる。ところが、そのような例が身近かなところにも多数あったのである。それに我々が気づいた経過を具体的に紹介して見よう。

2 身近かにある文字と発音の不一致の例

筆者の一人ベッド B. ビスタは、はじめて日本に来たとき、なぜ「トーキョー」がひらがなで「とうきょう」と書かれているのか、不思議に感じた。同じく米地は、通常カトマンズと書かれているネパールの首都のかな表記を「カトマンドゥ」とすべきであるという文(米地、2000)を書いた際、カトマンドゥの現地でのデヴァナガリー文字表記 काठमांडौ を掲げて現地の発音を示そうとした。ところが、その表記をそのまま文字通りに読むと、実はカトマダウ(ン)としか読めないことがわかり、驚いたのであった。

この両名の話聞いた同じく著者の一人姜は、母国韓国で、地名のハングル文字表記をそのままローマナイズした外国人向けの表記が、実際の現地の発音と異なっていることがあることを想起した。東京やカトマンドゥのような首都名そのものではないが、首都の駅名・ソウル駅の場合には表記は「ソウルヨック」と読めるが、実際には「ソウルリョック」のように発音される。その他、観光地では、光化門はハングル通りに読めば「クァンファムン」に近い発音になるが、実際は、「クァガムン」²⁾のような発音で、時には「カガムン」のように発音されることもある。

3 日本や中国の漢字地名の難しさ

日本に来た外国人にとっては、漢字とかなという2種類の文字(カタカナとひらがなに分ければ3種類)があることは大変厄介な問題である。特に表意文字である漢字は、漢字文化圏の人たち以外にとっては、その複雑な形と数の多さに辟易してしまう。さらに表意文字である漢字の場合は文字の読みと実際の読みが一致しない例は大和(やまと)を始め数多い。この種の問題については奥田(1984)が飛鳥(あすか)などを例として取り上げて論じたことがある。

文字の読みと合っていても、読み方が幾通りもある例は以下のように多数あり、これらは日本(にっぽん?、にほん?)人にとっても難しい問題である。

漢字の場合は、読み方が多様なことは致し方ないことで、例えば、鹿児島県に「川内(せんだい)市」があり、仙台(せんだい)市には「川内(かわうち)」という地域がある。また、同じ三田と書いても、東京都港区の地名は「みた」であり、兵庫県には「さんだ」市がある。東京都には「小平(こだいら)市」があり、北海道には「小平(おびら)町」があるなど、枚挙にいとまがない。

中国の地名の漢字は、日本の呉音、漢音、訓などの混用に比べれば、むしろ単純で表音文字に近いものの、外国人から見ると北京は Beijing とローマナイズされる「バイジン（グ）」あるいは「ベイジン（グ）」なのか、Peking にあたる「ペキン」なのか「ペイチン」なのか（日本の教科書では、この両者を使うことになっている）、さては広東語の「パッキン（もしくはパッケン）」なのか、漢字からは判断できない。

哈爾濱の発音も「ハルピン」（日本では第二次大戦まではこう呼んだ）か、あるいは「ハルビン」（最近の日本の教科書などにはこの読みを用いることになっている）なのか、現地の発音「ハーアルビン」なのかも漢字からはわからない。

けれども、かなは表音文字なので学習しやすく、もし振りがな（日本独特の工夫）があれば読むのは比較的容易であると一般的にはいえる。それで英語の spelling pronunciation（綴り字発音と訳される）に当たる語が日本語には無いのもこのためかもしれない。

ところが、ここにも躓きの石がある。振りがながかならずしも発音通りでは無いことがあるからである。英語の場合に較べれば、そのような例は少ないが、かつての歴史的かな遣いでは、九州を「きうしう」、神戸を「かふべ」、近江を「あふみ」、王子を「わうじ」、岩手を「いはて」と書いていたので、発音とかな表記は必ずしも一致していなかった。

1946（昭和21）年に内閣告示「現代かなづかい」が示された。この告示によって、日本語のかな表記は、ごく少数の例外（「…へ」や「…は」のような）を除けば、原則、発音通りにかな表記されているように思い込みがちである。ところが告示では、長音記号「ー」を用いないことにしているため、長音の多くは「う」をつけて表記することにしてしまった。このため、上記九州以下の地名（岩手を除く）や、東京、京都、北海道など長音を含む地名が、実は、かな綴りと発音が一致しないのである。

II 地名 Worcester の表記

1 英国の地名 Worcester の表記

ウスターという地名はむしろソースの名として日本では知られている。というよりも、日本でソースといえば、普通はウスターソースのことである。英語では Worcester sauce、これをウォーセスター・ソースとは呼ばない。

このソースは、もともとはイングランド西部の Worcester ウスターという都市の付近で作られたのでその名がある。また、旧州名の Worcestershire の名から付いたともいわれ、ウスターシャアソースとも呼ぶ。なお、日本の教科書などの表記の指針になっている『新 地名表記の手引』（教科書研究センター、1994）では、ウスターと表記することとしている。

もっとも、英国ではウスターといえば、むしろ同地産の磁器（ウスター・チャイナ）を指すことが多い。

このウスターを綴り通りに読めば、ウォーセスターとなり、実際の読み方と違う、この種の読み方を英語では spelling pronunciation（綴り字発音）という。

英語は、本来は表音文字である英字（いわゆるローマ字の系統に属する）26文字で表記するが、表音的ではない発音と spelling pronunciation との双方があって、しかも前者がより多用されているという単語も少なくない。例えば listen や boatswain のような例があり、非英語圏の人には読みにくい語彙である。したがって、地名にもウスターのような例があるのは不思議ではないが、正しく伝えにくい一種の欠陥地名ともいえる。

表音文字ならば文字通りに読めば通じるはずなのにそうはならない、つまり「文字通り読めない地名」は、実はそのほかの言語圏の地名にも少なくない。

2 米国の地名 Worcester の表記

Worcester という地名は、かつて大英帝国の植民地であった地域には、本国の Worcester に因んで、同じ地名が各地にみられる。しかし、本国におけるものとは異なった発音になっている例があるのは興味深い。

ここでは、米国の場合を考えてみよう。マサチューセッツ州の工業都市である Worcester が、よく知られている。もともとの英国の Worcester が WUS-ter ウスターと発音するのに対し、この都市の場合は WUH-stehr と発音するので、ウーステァァというような感じになる。このほか、米国各地にある Worcester においては、それぞれ WOR-stuhr ウォルスターァとか、WOO-stehr ウォーステァァなどさまざまな発音されている。なお、これら Worcester の発音については“The Columbia Gazetteer of the World Vol. 3”の記載が詳しく、上記の発音の標記も同書に従った。

III 地名東京の表記

1 トウキョウかトーキョーかトオキョオか

「東京」のかな表記は「とうきょう」であるが、日本人はこの綴りで「トーキョー」と読むことを、自明のこととして疑問も持たず、不自然にも感じない。

しかし、外国人はローマナイズの“Tokyo”または“Tōkyō”の綴りならば「トーキョー」と発音できるが、かな綴りの「とうきょう」は“To-u-kyo-u”と読むはずなのに、なぜこれで「トーキョー」と読むのかと当惑するのである。

1946(昭和21)年、内閣告示「現代かなづかい」の細則第27の「キョおよびギョの長音は、きょう、ぎょうと書く」の例示に東京があげられている³⁾。歴史的かな遣いでは「とうきやう」と書いていた「トーキョー」と読んでいたのであったが、現代かなづかいになって、実際の読み方にやや近づけて「とうきょう」と書くように直したのであった。

しかし、この変更は中途半端で、長音とは異なる「う」に置き換えられ、本来の発音とは異なってしまった。本来の発音に合致するかな表記にはせずに、Tō という長音を、Tou と続く二重母音の形に表記することにしたのである。

この場合、もし本来の発音に合致するかな表記とするには、どのようなものであるべきであったかは、かなり難しい問題であろう。「トーキョー」、「トオキョー」、「トーキョオ」、「トオキョオ」等々、様々な表記が考えられるが、いずれも、口をオを発音する形で開いたまま発音する。これに対して、「現代かなづかい」で綴り通りに発音すれば、二度も口をウの形に窄めることになり、不自然である。

なお、外国人はときに東京を「トーキョー」、京都を「キョート」などと聞き取って、それぞれ Tōkyō や Kiōto のように綴ることがある。

2 日本語における表記の仕方の種々相

「現代かなづかい」のなかで、歴史的かな遣いのなごりを強く残したのが、長音をホで示していたものをオで表記する事例であった。例えば遠野は、かつては「とほの」と表記したが「とおの」と書くことに改めた。逆に、これが自然な形となって、綴りと発音がほぼ一致し、Tōno という表記とも、かな

り近い発音の形になったのである。

一方、長音を「う」にした「とうきょう」などの事例に似たものは他にもある。例えば、永平寺町の「えいへいじ」は、実際には「エーヘージ」つまり *ēhēji* と発音される。これもまた、長音を「い」に置き換えて二重母音の形に表記したのである。同じように、飯田は「いーだ」、飯豊山は「いーでさん」と発音されるのに、それぞれ「いいだ」、「いいでさん」と表記される。

3 日本の主要地名の読みと表記の問題

さきに筆者らは、東京を日本の地名の例としてあげた。しかし、もちろん、これは一例に過ぎず、小さな問題といえないこともない。しかし、実は外国人が日本の地理を学ぶとき、漢字と異なり表音文字でわかりやすいはずのかな書きが、実は正しく発音を示していないものが、あまりに多いことに気づくのである。

以下、日本の国土を理解しようとするさいに、基本的に重要と思われる地名を取り上げて検討してみよう。括弧内にはかな書きを示したものが、発音との“ずれ”のあるものである。

日本の四大島

本州（ほんしゅう←ホンシュー）
北海道（ほっかいどう←ホッカイドー）
九州（きゅうしゅう←キューシュー）
四国

日本の八地域区分

北海道（ほっかいどう←ホッカイドー）
東北（とうほく←トーホク）
関東（かんとう←カントー）
中部（ちゅうぶ←チューブ）
関西
中国（ちゅうごく←チューゴク）
四国
九州（きゅうしゅう←キューシュー）

日本の主要六都市

東京（とうきょう←トーキョー）
大阪（おおさか←オーサカ）
京都（きょうと←キョート）
名古屋
横浜
神戸（こうべ←コーベ）

こうしてみると、驚くべきことには主要地名の過半数がかな書きの表記と発音とが一致していないのである。

その主たる原因は、日本の地名のうち、特に主要地名のうち主要島名や地域区分の場合には、音読みのものが多く、それらに長音が含まれ、二重母音として表記されるものが数多く含まれるためである。なぜなら、それらは、その土地の住民が古くから用いていた地名とは異なり、行政的あるいは学術的な必要性から地域をまとめて新たな呼称を付ける必要が生じ、大和言葉を離れた音読みになることが多いのである。

また主要都市名のなかで、京都や東京が音読みで長音を含んでいるので二重母音を含む表記になっているが、これは京都は中国の首都の呼称に倣った名であり、その京都に倣って東京の名が作られたためである。

もちろん大阪をはじめ訓読みのものにも、二重母音のものがあるが、訓読みの地名には比較的その例は少ない。

また、特に音読みが普通で、そのため長音を二重母音で示すものの多いのは、旧国名を州をつけて略称する場合である。奥州、上州、房州、甲州、長州などがその例である。

一方、アイヌ語起源の地名には長音の含まれるものは、そう多くはないものの存在し、二重母音として示される。下記にその例をあげよう。

壮瞥(そうべつ←ソーベツ)

新冠(にいかっぷ←ニーカップ)

夕張(ゆうばり←ユーバリ)

湧別(ゆうべつ←ユーベツ)

IV 地名 काठमाडौं の表記

1 カトマンドゥかカトマダァ(ン)か

ネパールの首都カトマンドゥの表記は、現地ではデヴァナガリー文字の काठमाडौं が用いられている。この文字はサンスクリット語やヒンドゥー語などインド亜大陸の諸言語を表記する文字である。いろいろな言語を表現するのに用いられているのは、歴史的要因以外に表音文字であることも関わっているであろう。

ところが、さきほどの表記 काठमाडौं をそのまま読むと、カトマダァウンないしはカトマダァウのように聞こえる発音になる。この発音でも意味が全く通じない訳ではないが、日常は、カトマンドゥという呼び方(発音)をしている。このカトマンドゥという発音をそのままデヴァナガリー文字で示すと काठमाण्डू となるが、この綴りの表記は普通は使われない。

一字ごとに検討してみよう。

कは喉音で無気音の ka であり、日本語のカに近い。

टは a に当たる母音を略した形(母音記号)で、कと組み合わせると kha となり、カーの音に近いが、本稿ではカと表記する。

थは反転音で有気音の tha(タ)もしくは th(ト)に当たり、日本語のタやトよりは強く発音する。

मは両唇音で鼻音の ma(マ)である。これに前記の a にあたる टがつくから、発音は ma(マ)でよい。

ここまでの前半は、表記と発音は合致していて、かな表記でも「カトマ…」(ないしは「カータマ…」など)と書くことができる。

次に、後半部分の文字表記を検討してみる。

𑖅は反転音で無気音のダである。発音記号はdで示す。舌の先を上の歯茎近くに当てて発音する（この種の発音は反舌音ともいう）から、英語のrの発音、つまり巻き舌に近くなるので、ダとラの中間のような音になる。𑖆は𑖆の上に鼻音化することを示す記号が付加されたものである。これが付くと、ā すなわち、かな表記の「…ァウ」または「…ァウン」のような発音になるのである。したがって、काठमाडौँ という表記をそのまま読めば、「カトマダァウ（ン）」という発音になり、後半の「…ダァウ（ン）」が実際の呼称に合わない。

2 現地の呼称「カトマンドゥ」に合わせてみた表記

では、現地の実際の呼称「カトマンドゥ」のうち「…ンドゥ」にデヴァナガリー文字を当ててみよう。…ンにはほぼ相当する文字は𑖇で、鼻音のn（発音記号で書くと𑖇）である。

ドゥに当たる文字は𑖅である。これは前記の𑖅つまりdに、uに当たる母音記号が付いたものであるから、du、ドゥで、反転音であるからドゥとルゥの中間的な音になる。

結局、もしもカトマンドゥという現地の発音を、デヴァナガリー文字を用いて表記しようとする、काठमाण्डु という違った綴りになってしまうのである。

文頭にあげた Worcester の例と対比してみると、spelling pronunciation によって「ウォーセスター」と読むのに当たるのがカトマダァウ（ン）であり、「ウスター」と読むのがカトマンドゥに当たる。

東京との類比でいえば、「とうきょう」の文字通りに「トウキョウ」と発音するのがカトマダァウ（ン）的綴り字発音で、「トーキョー」と発音するのがカトマンドゥに相当するということになる。

ここで興味深いのはローマナイズ表記である。カトマンドゥ の表記 Kathmandu は、デヴァナガリー文字による表記をローマナイズしたものではなく、現地の実際の発音に近い表記をしている。（なお、英語圏では Katmandu という綴りも用いるが、現地ではほとんど用いない。）もしも文字表記に合わせれば Kathmadaun のようになったはずである。

このことは To-u-kyo-u とは表記せず Tōkyō または Tokyo と表記する東京の場合も、同様なのである。

V 地名 召海 の場合

1 金海はキムヘか

韓国で用いられているハングル文字は、きわめて合理的な表音文字で、綴りと発音とはほとんど一致する。しかし、この文字による地名の表記においても、やはり綴りと発音とは一致しないことがある。その例を挙げてみよう。

韓国南部の都市金海（キムヘ）は、日本の高等学校で用いられている地図帳にも「金海 キムヘ」として記載されていることが多い。金（キム）・海（ヘ）という明解で問題の無い地名のように見えるが、実は現地では、ハングル文字で示せば 召海 でキムヘ [kim-he] であるはずであるのに、기매 [ki-mæ] キメのように発音するのである。なお、ローマナイズ表記においても Kimhë と書く。

韓国語では、この 召海 キムヘが 기매 キメになるように、一種の音便⁴⁾のために、前の音節と後の音節とが別々には発音されず、繋がって別の音になったり、繋ぎの部分が移動したりすることが多いが、それらはハングル文字の表記からはわからないのである。

2 その他の韓国の地名の場合

その他、次のような例もある。가회동 (嘉會洞) は、[ka-hwe-dong] カフェドン (グ) と読む表記であるが、実際には [ka-e-dong] カエドン (グ) と発音され、これをハングル文字で示すと、가예동 となるのである。また 왕십리 (往十里) という地名はそのままハングル表記通りに読むと [wang-jip-ri] ワン(グ)シプリとなるはずであるが、実際には、[wang-jim-ni] ワンシムニと発音され、これをハングル文字で書くと 왕십니 になってしまう。

전라도 (全羅道) は、[tʃʌn-ra-do] チョンラドという読みになる表記であるが、発音は [tʃʌl-la-do] 질라도 チョルラドとなる。韓国人も日本人と同じく、l と r の発音を同一音に意識しがちなので、綴りと変わった読みとは明確には認識されていない。このチョルラという読みは『新 地名表記の手引き』(教科書研究センター、1994) にも示されている。

また、「はじめに」で例示した光化門の場合は、광화문 [kwang-hwa-mun] が、実際には、광아문 (ときには 강아문) すなわち [k(w)aŋa-mun] という発音になっている。

同様の例は日本にもあり、神田 (かんだ: かみだ、かむだ、からの音便) の類いのように正式な地名の読みとなった地名もあれば、白馬 (岳、村) のように正しくは「しろうま」で、一般にはシロンマと呼ばれる例もある。もっとも現在はハクバの呼称が一般化してしまっている。韓国は漢字とハングル文字の併用であるから、日本の場合と似て、ハングルで書かれたものが、そのまま発音を表しているように思ってしまうのは、同じく漢字とかなを併用する日本人が振りかなを実際の発音をそのまま示しているという場合の錯覚と共通する点がある。

3 ローマナイズ表記 Seoul の問題

これまで例示した地名表記と発音の“ずれ”の問題は、その国あるいは地域で用いられる表音文字による地名表記が、実際の発音と異なる事例であった。ところが韓国の首都ソウルの場合は、ハングル文字で示される 서울 は [sɔ-ul] で、発音と一致しているが、ローマナイズ表記 Seoul は [si-o-ul] ないしは [se-o-ul] で、実際の発音とは合わない。

これは、かつて18世紀ころまでは [si-o-ul] ないしは [sjo-ul]、すなわち 서울 (서울 とよく似ているが、前の文字が異なっている) と示される発音であったので、その当時は Seoul の表記が実際の発音に適合していたのであろう。つまり、発音の変化に対し、ハングル文字の表記はそれに合うように変わったが、ローマナイズ表記は昔のままであるために生じた不一致なのである。

しかしながら、もしソウルという発音に近いローマナイズ表記をしようとするすると Soul となり、英語の soul³⁾ と紛らわしい。

VI 地名表記と発音の“ずれ”の問題点と対応策

1 地名表記と発音の“ずれ”の種々相

本稿で取り上げた主な地名5つについて、発音と表記との間にどのような“ずれ”が生じているかを、表に示した。表の現地語による綴りやローマナイズした綴りには、正確にカタカナ表記することは難しいが、比較しやすいようにカタカナによる表記を付した。

この表にもみられるように、基本的には表音文字による表記と発音とが異なったものになる例を本稿では主に論議した。ただし、ソウルの場合はローマナイズ表記が現地語の発音と異なる例である。

付表 本稿で取り上げた主な地名における発音と表記との間の“ずれ”

日本における 一般的かな表記	現地語の表音文字 による表記	現地における発音	ローマナイズ 表記
ウースター またはウスター	Worcester ウォーセスター	ウスター	Worcester ウォーセスター
トウキョウ	とうきょう トウキョウ	トーキョー	Tōkyō トーキョー
カトマンズ	काठमाडौं カトマダウ (ン)	カトマンドゥ	Kathmandu カトマンドゥ
キムヘ	김해 キムヘ	キメ	Kimhē キムヘ
ソウル	서울 ソウル	ソウル	Seoul シオウル

凡例： で囲んだ部分が、現地での発音通り、もしくはそれに近いもの

表音文字による表記と発音とが異なるものには、その言語や慣習などによってさらに種々のバリエーションがあり、カトマンドゥを日本ではカトマンズと書くような、ザ行とダ行の同一視という日本語独特の問題が付加された事例や、韓国におけるローマナイズは必ずしも現地語の発音とは合っていないものもあるという事情、などが反映して複雑になっている。

表音文字による表記と発音とが異なったものになる原因はさまざまであり、本稿ではその原因の問題にはほとんど触れなかった。これらの“ずれ”の原因としては、韓国のハングル文字では音便、日本のかな文字では長音の表記、ネパールのデヴァナガリー文字や英国のローマン・アルファベット文字の場合は歴史的、慣用的な背景があり、あるいは他の言語との接触による発音の変化もあるかも知れない、というように、表記と発音との“ずれ”の原因は多様であるらしい。

2 地名表記と発音の“ずれ”の問題点

綴りと発音の“ずれ”はよくあることで問題にするほどのことはない、という考え方もあるであろう。しかし、国際化、グローバル化が進む世界で、外国からの旅人がせめて駅名や道路の表示、地図などの地名が通訳無しで読める程度には、その国の文字についての理解力を持つとすることが当たり前である。

その際、地名が綴りと一致した発音でないというのは、重大な問題であろう。表意文字とは異なり、表音文字なら読みやすいはずである。けれども、首都の名のカトマンドゥや東京、あるいは首都のソウル駅名でさえ、表記と実際の現地での発音と違うのでは困惑する。地理的情報としては、重大な欠陥とさえ言えるかもしれない。

日本の現代かなづかいは発音に近いので例外は少なく、表記のルールを覚えれば問題はないとか、長音を「う」という母音で表記するのは日本語の二重母音が長音化することから不自然でない、などという見方もあるが、「とう」は「トー」と発音するとのみ覚えたら、瀬戸内「せとうち Seto-uchi」は「セトーチ Setōchi」と誤った発音になり、やはり問題は残る。

ウスターのような、もともとローマナイズ表記であった地名と異なり、日本やネパールでは外国人向けに発音通りのローマナイズした表記があるので、この種の文字表記と発音の“ずれ”はこれまで問題にされたことはなかったが（韓国語の場合は Kimhŏ のようにローマナイズしたものも発音と“ずれ”る場合がある）、地名の一問題⁶⁾として看過できないと考える。

3 地名表記と発音の“ずれ”への対応策

現地の発音と表記の“ずれ”に対して、何らかの対策の必要はないのか、もし必要とすれば、どのような対策をとるべきか、などについては、検討すべき問題は多い。もし対応策を考えるならば、次の3つの方法がさしあたり考えられよう。

- ① 同一文字で、現地の発音通りの表記をカッコ書きなどで併記する。

例：とうきょう（とーきょー）

- ② ローマン・アルファベット文字で、現地の発音通りの表記を併記する。

例：とうきょう Tōkyō

- ③ 発音記号を併記する。

例：とうきょう tōkjo

このうち③の発音記号を付す方法は、正確を期すことは困難であり、また、一般の人にはなじみが薄く普及は難しい。上の例示も正しいかどうかは疑問である。

②は、日本など多くのローマン・アルファベット文字を用いていない国で、普通に使われている方法であるが、日常、ローマン・アルファベット文字を表記として用いている国では不可能である。また、前述の韓国の首都ソウル Seoul の例のように、ローマン・アルファベット文字による表記でも、発音と合わないものが慣習的に用いられている場合があり、全てが分かりやすいとは言い切れない。

①は最もオーソドックスな方法であるが、二つの表記が並んでいては、どちらの方で発音すればよいか、どちらが正書法的綴りなのかが、外国人には（ときには同国人にさえも）わかりにくい。例えば、Worcester (Wuster) と書くことにしたと仮定すれば、それを見た日本人が、この地名の二つの表記のどれを読み、どれを書けばよいか迷う可能性が高く、いい案とは言い難い。

ほかに、①②の併用の方法もあろう。すなわち、とうきょう（とーきょー・Tōkyō）と表記する方法である。ただし、長い記載になる上、この場合ももともとローマン・アルファベット文字を用いている多くの国々ではとれない。

こうしてみると適切な対応策はなかなか見当たらない。さしあたり、ローマン・アルファベット文字を用いていない国々では、②の方法で間に合わせてゆくことも可能ではあるが、日本の場合に限って言えば、ひらがなとカタカナとを併用して、「とうきょう（トーキョー）」などと表記することを検討してはいかがであろうか。

おわりに

筆者の一人米地は地理の立場から、ピスタは情報の側面から、姜は異文化交流への視点から、それぞれこの問題に関心を寄せるとともに、日本、ネパール、韓国などの地名情報について、疑問や意見を交換した。

今後、世界は一層の国際化、グローバル化が進展するとともに、一方では人種や民族の独自の文化を評価する多様性の重視も不可欠である。その両者を併せ考えながら地名のより適切な表記も検討すべきであろう。

著者らはそれぞれ専門分野も国籍も異なるため、この複雑な問題の検討や分析には思わぬ誤謬など至らぬ点が多いと思われる。広く読者の方々のご叱正、ご教示をいただければ幸いである。

謝辞 適切な助言をいただいた査読者の方々、ならびに岩手県立大学の各位に深謝申し上げます。

注

- 1) その土地で人々が日常的に用いている方言的な発音と、その人々が外来者に対して話をする時や、公的な場での発言、あるいは文字で示すとき、などに用いる共通語的な発音や表記とが異なる例は枚挙にいとまがない。例えば、東京の日比谷（ひびや）はシビヤと発音され、岩手県の水沢（みずさわ）はミンツァ、前沢（まえさわ）はメェザと発音された。故長井政太郎山形大学名誉教授によれば山形県の尾花沢（おばなざわ）はオバネと発音されていたそうである。こういう、かなり極端な方言的な発音は、近年少なくなってきたようではあるが、少し訛った程度ならば、まだ多くの例がみられる。
- 2) 「ガ」は、ガの鼻濁音の表記であり、[ŋa] 音を示す。
- 3) 告示の内容については、白石編（1960）に拠った。大蔵省印刷局発行のこの冊子は、いわゆる正書法の基準となったもので、編者の白石は元文部省国語課長であった。
- 4) 音便とは、発音上の都合から、もとの音とは違った音に変る現象を指しており、「知りて」が「知って」に、「飛びて」が「飛んで」になるような例をいう。英語で言う euphonic change に当たる。
- 5) Seoul と soul とは発音が同じであるが、後者は靈魂を意味するほかに、米国では黒人の文化と関わる意味で用いられることの多い微妙な語であり、敢えて発音に近いローマナイズ表記 Soul とはしない方が無用の混乱は避けられるのかも知れない。
- 6) 本稿で取り上げた地名には、それぞれ、異なった地理的背景や歴史的経緯があって、発音や表記の問題もこれらに関わっている。しかし、ここでは、それらには深入りはせず、発音の問題にとどめた。したがって、例えば東京の名と旧名江戸との関係、西京つまり京都と東京の関係、明治初年には東京はトーケイとも呼ばれたこと、等々の問題については佐々木（1998）など多数の文献があり、興味深いのが、本稿では略した。同様にカトマンドゥとその旧名カンチプルとの関係や、カスタマンガッという大きな建物の名「“木の家”の寺院」に由来するという地名の語源との関係、ウスターのローマによる支配と語源（ウィオゴルナ族の町の意であるという）との関係等々に関する問題も省いた。また、ソウルの名の由来にも複雑な経緯があることについては、姜在彦（1992）の書などに詳しい記述がある。

文献

- 奥田久 (1984) : 序説・日本地名考. 地理誌叢. 25-2. 5-10.
- 姜在彦 (1992) : ソウル. 文芸春秋.
- 教科書研究センター (1994) : 新 地名表記の手引. ぎょうせい.
- 白石大二編 (1960) : 当用漢字・現代かなづかい・送りがなのつけ方. 大蔵省印刷局.
- 佐々木克 (1998) : 首都東京が誕生するまで. 東京人. 125. 70-77.
- 梶村大彬 (1978) : 地理名称の表現序説. 古今書院.
- 米地文夫 (2000) : ドゥでもよいか、よくないかー外国地名のカナ表記、カトマンドゥの場合ー. 季刊地理学. 52. 191-194.
- Cohen, S. B. ed. (1998) : The Columbia Gazetteer of the World. Vol. 3, Columbia Univ. Press.

(2000年12月30日受理)

Dissimilarities when Writing and Speaking Place Names —the Cases of Worcester, Tōkyō, Kathmandu and Kimhē—

Fumio YONECHI, Bongshik KANG and Bhed Bahadur BISTA

Abstract Place names are a kind of basic geographical information for verbal and written expression. However, sometimes there are sometimes dissimilarities when writing and speaking place names, and even include differences in the original language's phonetic alphabet, like “Worcester” in England. Because of the dissimilarities, there are fears that foreign visitors might misread place names due to mistaken pronunciation based on the spelling. For example, “Tōkyō” is written “とうきょう” in Kana characters in Japanese. If a foreigner sees “とうきょう” on a signpost and pronounces it with the spelling spelled, the person would pronounce it unnaturally “To-u-kyo-u”. Similarly, the capital of Nepal is “Kathmandu” and is spelled “काठमाडौं” in the Devanagari script. The spelling pronunciation of the name as spelled is not “Kathmandu” but “Kathmadaun”. Of course, “Kathmadaun” is the incorrect. A Korean place name “Kimhē” is a different type of example. Although the name is written “Kimhē” in the Latin alphabet and “김해” (“Kimhē”) in Hangul characters, native speakers pronounce it “Kime”. This research gathering and analyzing several cases of the dissimilarities noted when writing and speaking place names. Several kinds of binomial notation for these place names were then proposed as useful method of pronunciation for foreigners.

Key words place names, phonetic alphabet, pronunciation, spelling pronunciation